

平成21年度

平和大使長崎派遣事業報告書

羽ばたけ平和の世界へ



松 戸 市

目 次

平和大使長崎派遣事業にあたって	1
世界平和都市宣言	2
平和大使長崎派遣大使募集	3
平和大使名簿	5
平和大使長崎派遣行程	6
新聞記事	12
平和大使の報告	13
「長崎へ」	川本 景介 14
「平和のために」	鈴木 亜加里 15
「平和大使を終えて」	小幡 祐太 17
「長崎派遣を終えて」	山田 政明 19
「あの日、あの時間」	清水 彬奈 21
「長崎で学んだこと」	久佐野 美奈子 22
「平和への思いを歌で」	増野 友梨奈 23
「長崎平和大使を終えて」	井山 陽菜 25
「長崎に行って学んだ事」	小林 美幸 27
「原爆への驚きそして思い」	熊川 大揮 29
「被爆国日本ができること」	高島 里夏 31
「原爆」	西 志穂 33
「長崎で思い学んだこと」	工藤 颯人 35
「原爆が落ちた町、長崎」	四家 明宜 36
「長崎に行って」	児島 一華 38
平和大使長崎派遣事業の随行を終えて	40
長崎平和宣言（平成21年8月9日）	42

平和大使長崎派遣事業にあたって

松戸市は、昭和60年3月に「世界平和都市宣言」を行い、これまでさまざまな平和事業を実施して参りました。

戦後64年が経過し、戦前生まれの人口が全人口の約24.5%、約3,123万6千人となっている状況で、当時の様子を知る術が少なくなっていることにより、被爆体験や戦争体験の風化が懸念されるところです。

我々は、次の世代へこれらの経験を継承することが、今、課せられた使命であると認識しているところです。

併せて、世界平和都市宣言の理念である世界の恒久平和を念願するということから、若い人たちに世界各地で続く紛争に対しても、目を向けるような施策が重要であると考えております。

そこで、平成21年度も、平和事業の一環として、昨年度に続き「平和大使長崎派遣事業」を計画いたしました。

松戸市の次代を担う若い世代に、被爆地へ行くことにより、被爆の実相や平和の尊さを学習し、また、学んだことや感じたことを周りの人に語り伝えていくことを期待して、事業を実施したいと考えております。

世界平和都市宣言

我が国は、世界で唯一の被爆国である。

何人も平和を愛し、平和への努力を続け、常に平和に暮らせるよう均しく希求しているところである。

しかし、現下の国際情勢は、緊張化の方向に進み市民に不安感を与えている。

かかる状況に鑑み、松戸市は日本国憲法の基本理念である平和精神にのっとり、平和の維持に努め、併せて非核三原則を遵守し、あらゆる核兵器の廃絶と世界の恒久平和の達成を念願し、世界平和都市をここに宣言する。

昭和60年3月4日 松戸市

World Peace City Declaration

[英語]

Mach 4, 1985

In the past, our country has experienced the sadness from an Atom Bomb explosion. This makes our nation determined that history will not be repeated.

All of us yearn for peace, continue making an effort to create peace, and wish that we all can live in a peaceful environment in the future.

However, presently around the world, international affairs are becoming increasingly tense and cause our citizens great concern.

In response to the present turmoil across the world, Matsudo City now more than ever, willfully observe the peaceful spirit that is the fundamental philosophy of the Japanese Constitution.

We will endeavor to maintain nation wide peace, comply with the three anti-nuclear principles and possess the desire to abolish all nuclear weapons and the accomplishment of permanent peace throughout the world.

Therefore, we now declare our city as the "World Peace City".

City of Matsudo

世界和平都市宣言

[中国語]

日本是世界唯一的核弹受难国。

我们热爱和平、为和平而奋斗、切望一个和平的生活环境。

但是、当今国际关系仍然紧张、市民深感忧虑。面对动荡的世界、松戸市郑重宣告本市将遵循日本国宪法基本理念、

高扬和平精神、为保障和平而尽力、坚持非核三原则、为在地球上废除所有核武器、建立一个永久和平的世界而积极贡献力量。

**世界平和都市宣言事業
第2回「平和大使長崎派遣」大使募集**

<募集要項>



松戸市では、戦争や核兵器の無い平和な未来を築こうという心を育んでもらうため、長崎市で開催される「青少年ピースフォーラム」へ参加する中学生を募集します。

<平和大使とは>

・「平和大使」とは、松戸市の世界平和都市宣言により、戦争や核兵器の悲惨さ、平和の尊さについて事前、派遣、事後研修を通じて知識を深め、そこで学んだことや感じたことを周りの人に語り伝えていくことが期待される人です。

<対象>

・市内中学校に在学する生徒で、戦争や核兵器の悲惨さ、平和の尊さについて学ぶ意欲があり、事前、派遣、事後研修に参加できる人を対象とします。

<定員> 15名（応募者多数の場合は、抽選とします。）

引率：松戸市役所 総務企画本部 総務課職員2名 ・ 添乗員 1名

<費用>

- ・市の負担 長崎への往復航空運賃、宿泊代、長崎での移動バス電車運賃、8/7の夕食、8/8、8/9の3食、8/10の朝食、昼食。
- ・自己負担 事前、事後研修の会場（市内）までの交通費、8/7の昼食など。

＜申込方法＞

- ・申込書に必要事項を記入して、任意の封筒に入れ学校に提出してください。

＜提出期限＞

- ・平成21年5月26日（火）

＜研修日程(予定)＞

1 事前研修

平和についてのオリエンテーションを行います。（自主学習）

6月13日（土）結団式及び第1回オリエンテーション

青少年ピースフォーラム等の内容説明。

7月上旬(予定) 第2回オリエンテーション

戦争、原爆、平和等について自主学習します。

8月上旬(予定) 第3回オリエンテーション

自主学習とスケジュールの確認

2 派遣研修

(1)場所：長崎市

(2)期間：8月7日（金）～10日（月） 3泊4日

(3)内容：青少年ピースフォーラムへの参加等

青少年ピースフォーラムとは・・・8月9日の平和祈念式典にあわせて、全国の自治体が派遣する青少年と長崎市の青少年とが一緒に被爆の実相や平和の尊さを学習し、交流を深めることで平和意識の高揚を図ることを目的として長崎市が実施しています。主な内容として、平和祈念式典への参列、被爆体験講話、平和関連施設見学、平和学習会への参加を予定しております。

(4)「平和大使長崎派遣」日程表

8/7（金）	市役所→羽田空港→長崎空港→長崎市内ホテル（自主学習）	
8/8（土）	午前	自主学習
	14：00～15：00	開会行事（被爆体験講話など）＜平和会館ホール＞
	15：10～17：00	参加型平和学習（被爆建造物等のフィールドワーク） ＜予定：原爆落下中心地碑、浦上天主堂ほか＞
8/9（日）	午前	平和祈念式典への参列＜平和公園＞
	13：30～15：30	参加型平和学習（室内） ＜平和会館ホールまたは原爆資料館＞
8/10（月）	ホテル→長崎空港→羽田空港→市役所解散	

3 事後研修

研修の報告会を行うとともに、研修で学んだ成果を生かし、戦争や核兵器の悲惨さや平和の大切さを伝えるため、活動報告書の作成などを行います。

平和大使名簿

かわもと 川本	けい すけ 景 介	(第一中学校	1 学年)
すすき 鈴木	あ か り 亜加里	(第二中学校	1 学年)
お ば た 小 幡	ゆう た 祐 太	(第三中学校	1 学年)
や ま だ 山 田	まさ あき 政 明	(第四中学校	1 学年)
しみず 清 水	あ や な 彬 奈	(第五中学校	1 学年)
く さ の 久佐野	み な こ 美奈子	(第六中学校	1 学年)
ますの 増野	ゆ り な 友梨奈	(小金中学校	2 学年)
い や ま 井 山	は る な 陽 菜	(常盤平中学校	2 学年)
こばやし 小 林	み ゆ き 美 幸	(栗ヶ沢中学校	1 学年)
くまかわ 熊 川	た い き 大 揮	(六実中学校	1 学年)
たかしま 高 島	り か 里 夏	(牧野原中学校	3 学年)
にし 西	し ほ 志 穂	(河原塚中学校	3 学年)
く どう 工 藤	は や と 颯 人	(根木内中学校	1 学年)
よ つ や 四 家	あきのり 明 宜	(金ヶ作中学校	1 学年)
こ じ ま 児 島	いち か 一 華	(和名ヶ谷中学校	1 学年)



〈平和大使結団式〉

平和大使長崎派遣行程

8月7日（金）

◆ 11：00 長崎へ出発

11時松戸駅に集合して、保護者、関係者に見送られ出発しました。

13時25分発スカイネットアジア航空37便で、羽田から長崎へ向かいました。

15時45分長崎空港着。バスでホテルへ向かいました。



〈長崎空港〉

◆ 19：00 千羽鶴作成（ホテル会議室）



〈千羽鶴作成中〉



〈千羽鶴完成〉

8月8日（土）

◆ 8：00 自主学习へ

ホテルから路面電車に乗り長崎歴史文化博物館へ向かいました。路面電車は、混雑していることが多く一度には全員が乗れないこともありました。午前中は、眼鏡橋、出島なども見学しました。



〈長崎歴史文化博物館〉



〈眼鏡橋〉



〈出島〉

◆ 13：00 長崎原爆資料館に到着

青少年ピースフォーラムに参加するために、平和会館へ向かう途中、昨日製作した千羽鶴を原爆資料館へ持参し「羽ばたけ平和の世界へ・みんなで広めよ平和の輪」という想いとともにより資料館内へ献納しました。



〈千羽鶴献納〉



〈松戸市の千羽鶴〉

原爆資料館を見学。被爆資料や被爆の惨状を示す写真などの展示をはじめ、原爆が投下されるに至った経過、核兵器開発の歴史、平和希求などのストーリー性のある展示を、平和大使は真剣に見学していました。

原爆の惨状を示す写真展示の中には、見るのがつらい写真もありました。

ここで改めて原爆の恐ろしさ悲惨さを実感しました。



〈実物大の原爆〉



〈長崎原爆資料館内〉



〈原爆被災物に直接ふれる大使〉

- ◆ 14:00 青少年ピースフォーラムに参加
平和会館ホールで、全国から27団体、236名が参加しての青少年ピースフォーラム開会行事がありました。そのなかで、講話者の山脇佳朗さんから被爆体験講話を聞きました。平和の大切さを伝えていってほしいという山脇さんの気持ちを平和大使はしっかり受け取っていました。



〈ピースフォーラム開会行事〉



〈講話者 山脇佳朗さん〉



〈コース別学習〉

- ◆ 15:10 被爆建造物等のフィールドワークコース（平和公園コース）出発
長崎市青少年ピースボランティア（高校生・大学生など）の方々が、原爆落下中心地付近と平和公園付近の様子を、写真資料等を活用して丁寧に説明、案内してくれました。



〈ボランティアの方々〉



〈原爆投下中心地付近〉



〈下の川の説明〉

- ◆ 19:00 食事及びミーティング
ホテルでの食事の後、明日の日程の確認等のミーティング行いました。



8月9日（日）

- ◆ 9:00 平和祈念式典参列
（平和公園内）

8時30分長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典へ参列するために、路面電車で移動しました。

式典会場では、青少年ピースボランティアの方々に案内してもらいました。原爆犠牲者のご冥福、世界の恒久平和を祈りました。



〈夕食〉

〈平和祈念像〉

被爆64周年
長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典
式 次 第
10時40分 開式
原爆死没者名奉安
42分 式辞（長崎市議会議長）
46分 献水
48分 献花
11時02分 黙とう
03分 平和宣言（長崎市長）
13分 平和への誓い（被爆者代表）
18分 児童合唱
23分 来賓挨拶
38分 合唱 千羽鶴
43分 閉式



〈大使参列〉



〈黙とう〉

◆ 13：30 ピースフォーラムのBコース平和学習に参加

コース参加者 80 名を 10 人の班に分けて、それぞれの班で、昨日のフィールドワークで見学したこと学んだことをもとに、平和について意見交換し班ごとに意見をまとめ発表しました。

全国から参加された人々と交流することができて、貴重な体験をすることができました。

最後に、ピースフォーラム終了証書をいただきました。



〈意見交換〉



〈各班のまとめ〉



〈各班の発表〉

◆ 17：15 自主学習

ピースフォーラム終了後、自主学習として、大浦天主堂、グラバー園を見学しました。

その後夕食を済ませて、ホテルに戻りました。



〈グラバー園〉



〈大浦天主堂〉

8月10日（月）

◆ 9：30 松戸へ出発

9時30分ホテルを出発。長崎空港へ向かいました。

空港待合室で昼食を済ませ、12時20分発スカイネットアジア航空 36 便で羽田へ向かいました。

悪天候のため、予定より遅れ、14時55分羽田空港に到着し、市のバスで市役所へ向かいました。



〈長崎空港待合室〉

◆ 16：50 松戸市役所到着
帰庁報告会

3泊4日の長崎での日程を終え、みんな
元気に市役所に帰ってきました。そのまま、
市民サロンへ直行し、市長、副市長に長崎で
体験し学んできたことを報告しました。



〈平和大使報告〉



〈帰庁報告会〉



〈記念撮影〉

長崎で知った平和の尊さ

松戸市の中学生 市長に「大使」活動報告

松戸市が長崎市に派遣した「平和大使」の中学生が、松戸市役所で川井敏久市長に活動報告や感想を語った。平和大使は市立和名ヶ谷中の児島一華さんら十五人で、八・九日に開かれた長崎市主催の青少年ピースフォーラムに参加し、九日の原爆犠牲者慰霊平和祈念式典にも参列した。フォーラムでは、長崎市と全国各地の青少年が一緒に被爆者から体験講話を聞いたり、意見交換したりし、浦上天主堂などの被爆建造物を見学した。派遣された全員が川井市長に報告し、「原



長崎市に派遣され活動報告する「平和大使」の中学生＝松戸市で

爆資料館の展示物が予想以上に悲惨で直視することができなかった。原爆や戦争のおろかさを伝えていきたい」「被爆して六十四年たった今もたくさんの方が亡くなっていることを知った」「核兵器のない世界が本当の平和だと思う」などと語っていた。平和大使の派遣は昨年からは、川井市長は「自分で見て聞いて対話して感じた思いを、家や学校で話してください。来年は人数を増やしたい」と話した。

(川田米)

8月12日「東京新聞」より

長崎で平和の尊さ学ぶ

松戸市の平和大使事業 中学生15人が帰庁報告

子どもたちに平和な未来を築く心をはぐくんでもらう松戸市の「平和大使長崎派遣」事業で、被爆地の長崎市に派遣された中学生15人が10日、同市役所を訪れ帰庁報告会を開いた。同日、長崎市から松戸市に帰ってきたばかりの生徒たちは、一様に充実感に満ちた元気な表情を見せた。川井敏久市長への帰庁報告では「戦後64年たった今もたくさんの方が（原爆の後遺症で）亡くなっていることに驚きました」「長崎で空を見上げて、ここから原子爆弾が落ちてきたのかと思うと怖くなりました」などと現地で抱いた思いを語り、平和の尊さをしっかりと学んできた様子だった。

同市の平和大使長崎派遣事業は、市内の中学校に平和大使への参加を募集し、



松戸市の川井敏久市長（前列右）と平川清副市長（前列左）に帰庁報告する平和大使たち

今年には46人の応募があった。その中から15人が抽選で選ばれ、今月7日から10日まで3泊4日のスケジュールで長崎市に派遣された。生徒たちは現地で被爆体験者の講話を聞いたり、9日に行われた平和祈念式典「た」と話した。

8月12日「千葉日報」より

平 和 大 使 の 報 告

『長崎へ』

第一中学校 1年 川本 景介

ぼくは、長崎平和大使として長崎に行った時に、心に残ったことが三つあります。

その中でも一番心に残ったのが長崎原爆資料館の展示物です。たくさんの展示物がありその中に原爆の熱線で溶けたビンがありました。そのビンを見ているうちにビンから放射能がでてくるのではないかと思い少し怖かったです。原爆の模型も展示してあり、大人の背の高さぐらいの大きさだと思っていたのに原爆がそれより大きくてびっくりしました。

二つ目は、ピースフォーラムに参加して、被爆地を歩いて回ったことです。歩いて回ったのは、爆心地や被爆当時の地層、浦上天主堂の柱、そして平和公園です。ボランティアの人に話を聞いておどろいたことがあります。それは三十年かけて作られた天主堂が一瞬でこわれたことで爆風の強さが分かったことや六十四年たった今も一年に約三千人の人が後遺症でなくなっていて、原爆がとても多くの人を今も苦しめているということです。

三つ目は、平和祈念式典に参加したことです。この式典には長崎市民だけでなく日本各地から、さらに外国からも参列している人がいました。この時「外国でも平和のことを考えているんだなあ」と思いました。この式典ではみんなの「平和にしよう」という気持ちが一つになったように思います。

ぼくは、この体験を通して本や教科書などで戦争のことを調べるより、実際に被爆地に行ってみた方がくわしく分かると思いました。

とてもいい経験をしました。世界が平和になるために自分で出来ることは何かを考えて行動していきたいと思います。

『平和のために』

第二中学校 1年 鈴木 亜加里

まず、長崎に着いた時、普通の街と変わらない印象を受けました。しかし、原爆資料館や被爆中心地碑、平和公園の全国から贈られた千羽鶴や世界15ヶ国から平和を願って寄せられたモニュメントに『平和』に対する思いや願いが他とは全く違うことを強く感じました。

次に、原爆資料館に展示してあった数多くの痛々しい写真には直視できない程の惨さを感じました。また、被爆者の講話に体が縛りつけられることが何度もありました。特に被爆地付近で亡くなられたお父さんを自分達で火葬した、という話には、胸が痛むなどの感情を通り過ぎた強い衝撃を受けました。

被爆者の中には、64年間、辛く、苦しい日々を送り、当時のことを思い出したくないという思いから、体験を話せなかった方もおられます。時が経ち、「被爆者である自分達こそが伝えていかなければ。」という強い決心のもと、今こうして私たちに体験を話してくださっています。これは、決して当たり前のことではなく、深い悲しみと平和への限らない願いが込められている、ということが身に染み、とても感謝しています。

テレビや新聞、祖父母から聞いた話で得た戦争の知識はありましたが、実際に長崎で知ったものは、非常に苦しいものでした。見たり、聞いたりするだけでも恐いのには体験した人の苦しみは計り知れません。

戦争や原爆は、人々に苦悩を与えること以外の何ものでもありません。核の使用や戦争は二度としてはいけないことだと改めて強く思います。日本は唯一の被爆国として原爆の恐ろしさを伝えることができます。長崎で感じたこと、願ったことな

どを率直に伝えていくことがとても大事だと思い、また実行していきたいと思いま
す。

最後に、平和大使として派遣してくださったことを心から感謝しています。

『平和大使を終えて』

第三中学校 1年 小幡 祐太

僕が戦争について興味を持ち考え始めて具体的に知ったのは、小学校六年生の時、「ガラスのうさぎ」という本を夏休みの宿題の読書感想文で読んでからです。もちろんその前からも社会の学習などで戦争について学んではいたけれど、具体的に詳しく知ったのはこの時が初めてです。

僕は原爆資料館や平和公園に行くどころか、長崎にすら行ったことが無かったので、最初は興味半分でこの平和大使に応募しましたが、今思い返すと、実際に長崎に行って学んだ原爆のすごさや戦争の恐ろしさの内容に比べれば、長崎に行く前の自分の戦争や原爆についての知識や考えは、とても小さな物だったと感じました。僕が実際に長崎に行って学び、経験してきた事の中に印象に残った事は三つあります。

まず一つ目は、原爆資料館で見て来た、原爆の被害にあった人や物、建造物などの事についてです。原爆は投下されて爆発した時に、ものすごい爆風とともに、レンガも焼けて、真っ黒にこげてしまう程の強力な熱線、そして、一見体に受けても何ともないが、後々恐ろしい後遺症を残す放射線の三つの恐ろしさがあります。この恐ろしい原爆の被害にあった物や、人の写真などが原爆資料館には展示されていました。その中の一つに、被爆地から一キロも離れているのに、ボロボロにこわれて使い物にならなくなったまま、原爆投下時刻の十一時二分を指したまま止まっている時計や、熱線を体中に受けて、全身が真っ黒に焼けた人の写真などもあって、とても恐ろしかった。

そして二つ目は、青少年ピースフォーラムでの事です。全国から集まった平和大

使達でグループを組んで、課題の「どのような状況が平和じゃないか」について皆で討論して、出た結論を発表した。僕は意見がはっきり言えるという事で、グループのリーダーになった。僕たちのグループでは、課題に対して、「いじめ」や「自殺」、「殺人」などを中心とする平和じゃない状況を提案して、それをどのようにすれば解決出来るかを模造紙にまとめて発表した。他のグループの発表も、それぞれ課題のとらえ方は違っても、素晴らしい発表ばかりだった。

三つ目は、平和祈念式典での事です。平和宣言にも、とても素晴らしい言葉だなあと思いました。

今回の平和大使では、学ぶ事も多く、原爆の恐ろしさにこわくなる事もあったけど、これからも平和大使として学んで来た事を、少しでも多くの人に伝えていきたいと思います。

『長崎派遣を終えて』

第四中学校 1年 山田 政明

僕が平和大使を強く望んだのは、『娘よ、ここが長崎です』という本を読んだことがきっかけです。著者は、自らも被爆し、如己堂で、生涯平和の尊さを訴え続けた永井博士の娘である筒井茅乃さんです。親から子どもへ、そして、そのまた子どもへと、平和の尊さを伝え続けていることを知り、僕はどうしても長崎を訪れ、自分の目で見て、心で感じ、戦争と平和について深く考えて、僕もその思いを、次の世代に伝えたいと思ったからです。

初めて長崎へ降り立った時、本当にここが、六十四年前、一瞬にして全てを奪い去られた街なのかと思いました。バスから見る景色は、平和で美しい街だなという印象を受けました。でも、翌日から色々な行事に参加する度に、それは、長崎の人々が平和を願い、人々が努力して築き上げた街であることに気づきました。

青少年ピースフォーラムに参加し、数多くのことを学びました。特に、被爆した方から直接お話を聞いた時は、鳥肌が立ったり、胸が熱くなったりして、すごく衝撃的でした。フィールドワークでは、平和公園や爆心地へ行き、今なお原爆のつめ跡が残されているのに驚き、その悲惨さを改めて感じました。平和祈念像には、原爆の恐ろしさと平和への思いが込められていることは知っていましたが、その意味を思い出しながら、像を見つめました。

八月九日の平和祈念式典への参列は、決して忘れることはないと思います。平和への誓い、黙祷、鳴り響く長崎の鐘、祈りを込めた合唱…長崎の人々が、この場所から全世界へ向けて、平和の尊さを強く発信しているように感じました。僕の人生の中でも、なかなかできない貴重な体験ができたと思っています。

小学四年生の時、広島へ行き、原爆ドームや記念館を見学しましたが、その時は原爆の悲惨さに目をおおい、恐怖を覚えたただけでした。でも、長崎派遣を終えた今は違います。世界には、この核兵器を保有した国があり、核実験を行っている国があると聞いて、『知っているのですか？核兵器の恐ろしさを…。長崎や広島の街を訪れてみて下さい。原爆の恐怖と悲惨さ、人々の苦しみや平和への願い、平和の尊さが伝わってくるはずですから…』と、僕は叫びたくなります。

平和大使として学んできたことを、一人でも多くの人に伝えていこうと思います。

『あの日、あの時間』

第五中学校 1年 清水 彬奈

私は長崎に行きました。原子爆弾の事を勉強するために。二日目にピースフォーラムで浦上天主堂や原爆中心地、平和公園に行きました。私がおの日、一番驚いたのは浦上天主堂です。浦上天主堂といっても、今残っているのは一本の柱だけです。なぜ私がおの一本の柱に驚いたかという、その柱の下部分が爆風で何センチメートルかずれていたからです。浦上天主堂は、レンガを手作業で一つずつ積み上げて、三十年かけて造ったそうです。たった一発の爆弾で一本の柱以外、跡形もなくなってしまったのです。造った人達はとても悲しい気持ちになったのではないのでしょうか。でもそれよりも悲しいと思ったのは、次々と亡くなっていく家族や友達を助けられずに見殺しにしなければならない事です。そして生き残った人も自分の死への恐怖。なんでそんな思いをしなくてはならなかったのでしょうか。戦争や原爆で亡くなった人々は、なにか悪い事をしたわけではありません。ただ、その時代に産まれてきただけなのです。私達は戦争で死ぬ心配がなく暮らしています。これも私達が良い事をしたからではありません。この時代に産まれてきただけです。

最近、戦争や原爆を体験した人が少なくなっています。だから、体験した人や私達平和大使、戦争や原爆の事を知っている人達がどんどんみんなに平和の大切さを伝えていかなければならないのです。私は平和式典で黙とうをした後、考えてみました。今から六十四年前、原爆が投下された直後の事を。想像するととても怖くなりました。みなさんどうか忘れないで下さい。今から六十四年前、八月九日、十一時二分の出来事を。

『長崎で学んだこと』

第六中学校 1年 久佐野 美奈子

昭和二十年八月九日。この日は、長崎に恐怖の原爆が落ちた日です。

そして六十四年後の今、私は教科書には書いていないことを知りたいと思い、平和大使になりました。

長崎に行って二日目に、青少年ピースフォーラムがあり、被爆者の方からのお話で、山脇佳朗さんが原爆体験話をこう語ってくれました。

「体の傷は治ったけど、心には今も深く傷がついています。」

私は、その言葉を聞いて呆然とし、強く印象に残りました。

それほど、わすれてはいけない、わすれられない悲惨なできごとだったんだとあらためて、実感しました。

三日目の平和祈念式典では、被爆者の方や遺族を初め、地方からもくる人達が多勢いました。

そして、十一時二分の時がやってきました。

私は黙とうをして、こんなことを願っていました。もう二度と戦争をしないで、平和な毎日が続きますように、と。

その時、私以外の人達みんなもそういう事を願っていたような気がしました。

私は、長崎に行く前は正直あまり戦争のことはわからなかったのですが、この平和大使になっていろんなことを学びました。

今は、はっきり言えます。

戦争は、絶対にもうしてはいけない、させてはいけないんだということを。

この体験したことを、たくさんの人に伝えていきたいです。

『平和への思いを歌で』

小金中学校 2年 増野 友梨奈

2009年の夏は、生涯忘れられない夏となりました。

青少年ピースフォーラムで、被爆者の山脇さんのお話を聞いて、悲惨だった情景が鮮明に伝わってきて、胸が苦しくなり、深い悲しみを覚えました。本当は、あの日のことは思い出したくない、と思っているはずなのに話をしてくださることはとてもありがたいことだと思いました。また、高齢化や後遺症によって被爆者が減り続けている中、いのちある限り戦争の悲惨さ、平和の尊さを語っていこうとするその姿に感動しました。

その後、フィールドワークで原爆落下中心地に行きました。思わず私は空を見上げ、ここに一瞬にして多くの尊いいのちを奪い、街を廃墟とさせた悪魔の兵器が落ちてきたかと思うと、怖くてなりませんでした。

平和祈念式典では11時2分に全員で黙祷を捧げました。その時、長崎の街には平和の鐘と同時に消防車、救急車のサイレンが響きわたりました。私は原爆で亡くなった方のご冥福を祈るとともに、日本が最初で最後の被爆国で、これ以上原爆による犠牲者が増えないことを願いました。1分間がとても短く感じました。私は被爆者の声を聞いてほしいので、より多くの方が長崎へ行かれることを強く望みます。そしてその声を日本で起こった悲惨な事実を風化させないためにも、次世代へ語り継いでいかななくてはならないと思います。

オバマ大統領の明言により、世界平和への大きな第一歩を踏み出しました。「過去と未来をつなぎ 世代を越え 国境を越え^くに ともに語り合おう 手を取り合って 心をつないで 世界へ響け長崎の声！」(合唱曲の歌詞の一部より) 私の思いはこの

歌詞そのものです。この合唱曲に思いを込めて、私は長崎前市長の伊藤一長さんのご遺志と真の平和を歌で伝えていきます。

最後に、今回貴重な体験をさせてくださった松戸市役所の方々並びに、現地でたくさんの方々に教えてくださった長崎の方々に感謝いたします。ありがとうございました。

『長崎平和大使を終えて』

常盤平中学校 2年 井山 陽菜

私は大使として長崎に行き、青少年ピースフォーラムと平和祈念式典に参加しました。

8月8日に見た長崎原爆資料館はとても衝撃的でした。その資料館には原爆の恐ろしさが語られていました。私は設置されたビデオを何気なく見ました。最初はよく分からず、ただ見つめるだけでしたが、よく見ていると、全部、原爆の熱線でやられた人の亡骸だったのです。あまりの悲惨さにおどろきました。涙もでてきました。それが分かった時には、声もでませんでした。しかし心の中では、「この原爆の悲惨さを伝えなければいけない。」と強く思いました。被爆者達の犠牲は絶対無駄ではありません。生き残った人、死んでいった人、どちらの人もすごく苦しんだと思います。自分の中で強い気持ちが新たに芽生え始めた、そんな気がしました。

次の日に平和祈念式典に参列しました。

なんか、味わった事のない空気が会場を包みました。被爆者の方々は泣きながら司会の進行を静かに聞いていました。そして、あの、恐ろしい11時2分がやってきたのです。あたりが静まり返り、平和の鐘が聞こえてきました。とても長い時間でした。私も目をつぶり、平和を願いました。

平和祈念式典も終わり、平和の泉を見ました。私の目は吹き上がる水、ゆれる水面、そして目の前の像に止まりました。

「のどがかわいてたまりませんでした。水にはあぶらのようなものが一面に浮いていました。どうしても水がほしくてとうとうあぶらの浮いたまま飲みました。」

石像に書いてあった少女の日記です。この言葉は私の頭の中で今もリピートして

います。

原爆は人類をほろぼす恐ろしいものです。私達はこの恐ろしさをまわりの人に伝えていく事をここに誓います。

私は長崎で原爆と平和について学びました。正直とても怖かったです。それでも被爆者の方達の思いは確実に伝わっています。

オバマ大統領が核は使ってはいけない、と発表した時に64年目にしてやっと被爆者の方の思いが伝わったんだと思います。私はすごい、としか思えませんでした。

日本が最初で最後の被爆地であるためにも日本はオバマ大統領を支持しなくてはならないと思いました。

『長崎に行って学んだ事』

栗ヶ沢中学校 1年 小林 美幸

私は、戦争と平和を学びに原爆の落とされた長崎へ松戸市の平和大使として行って来ました。初日、原爆の落とされた長崎はどのような所なのか、ドキドキしながら長崎へ行きました。

2日目に、青少年ピースフォーラムに参加しました。一番心に残ったのは、フィールドワークで浦上天主堂跡を見学しに行った時の事でした。(あの何百キロもありそうな天主堂が一瞬でこんなにずれてしまったなんて・・・) とても想像が付きませんでした。原爆資料館にあった原子爆弾の模型の大きさからして、とてもそのような威力は出せないと思っていたからです。しかし、長崎に行って分かりました。原爆というのはどれほど恐ろしいのか。想像を遥かに超えた破壊力があるという事が。原爆資料館に入ったとたん物凄く暗い雰囲気になり、あまりにも恐ろしい場面で直視できないものもありました。皮膚は焼け爛れ、体全身が真っ赤になっていて、髪の毛が抜けていて、洋服はボロボロに破れて……。とても見ていられなくなりました。とっさに鳥肌が立って、「もう二度とこんなことはしてはいけない。」「平和というのがどれほど大切なのか」をさまざまな資料が教えてくれました。

翌日、長崎原爆犠牲者慰霊平和祈念式典に参加しました。黙とうをしている間、鐘の音と同時に64年前の8月9日11時2分。あの日の風景がいろいろと頭に浮かびました。水が飲みたいと苦しみながら無惨に死んでいく人々。私はせめて、死ぬ前にきれいな水だけでも飲ませてあげたかったです。

その後、奥村アヤ子さんの被爆体験を聞きました。家族を奪われ、体全体がボロボロになり病院にも通えない毎日、もし自分がそうだったら、何もかも投げ出して

死んでいたかもしれません。反面、奥村さんはすごい人です。被爆体験を語り継ぎ、一人でも多くの人々に戦争の怖さ、そして、平和の大切さを知ってもらおうとがんばっています。私もこの4日間で学んだ事を松戸に帰って伝えていきたいと改めて思いました。

『原爆への驚きそして思い』

六実中学校 1年 熊川 大揮

僕は、この夏、長崎派遣平和大使として、長崎に行きました。

まずピースフォーラムで被爆体験者の話を聞きました。この人は爆心地から少しはなれたところで被爆し、運良く助かったのですが、それからは、地獄だったそうです。僕は、この話を聞いて驚き、もしこの時生きていたら、どうなっていたか、想像しただけで、恐ろしくなりました。

そして、ホテルへ帰りテレビをつけたら、ほぼ全チャンネル、戦争と平和についての番組でした。「戦争」について松戸では、少ししか報道せずに、すぐ別のニュースへ移ってしまいます。僕は、こんなに平和についての思いが違うのかと、びっくりさせられました。

正直の所、僕は、平和について、テレビ他でも、積極的に取りくんでほしいです。五分だけでもいい。とにかく平和について、全世界の一人一人が考えてほしいです。そうすれば、平和について、誰もが、少しでもきっとわかるはずです。

次に浦上天主堂の柱へ行きました。よく見ると下の石とその上の石が、元々ぴったりになっていたのが、数センチずれているのがわかりました。これは、原爆が爆発した時に出る「爆風」と呼ばれる物でした。原爆の悲惨さが64年もはなれていても、すごく伝わってきました。

僕は、64年前のでき事を、ムダにしてはならないと思います。被爆者の方々が、こうして苦しみを伝えてくださるからこそ、僕たちは戦争や核兵器の恐ろしさを知り、平和の尊さを学んで、平和を守っていこうという強い決意を抱けるのです。

今回の長崎派遣で学んだ多くの事を一人でも多くの人に伝えられれば核兵器廃

絶へつながると思います。

これからもずっとこの思いが語りつがれればいいと思います。

『被爆国日本が出来ること』

牧野原中学校 3年 高島 里夏

私は以前平和学習で二度広島に行きました。一回目は、小学校の修学旅行です。初めて見た原爆資料館での被爆後の子供の写真は、思わず目をそらしたくなるような悲惨なものでした。全身の皮膚が垂れ下がり、顔の形も分からなくなっているその姿に、一瞬のうちにたくさんの人の命を奪い、何十年も人々を苦しめ続けている原爆がいかに恐ろしいものか思い知らされました。二回目は中学校の平和学習で行きました。実際に被爆した語り部さんのお話を聞くうちに、私たちに出来ることは何かを真剣に考えるようになりました。

もう一つの被爆地の長崎を訪れることは、私のかねてからの念願でした。日本が鎖国していた時代に唯一貿易を許された町、長崎は国際色豊かな所でした。その一方で、被爆した跡があちこちで見られ、その中でも、平和公園の周りに置かれた世界各国から贈られたモニュメントからは、みんなの平和に対する熱い思いが感じられました。八月九日午前十一時二分、平和の鐘が鳴り犠牲となった人々を追悼し全員で黙とうをささげました。世界各国から沢山の来賓が招かれ、国内からも内閣総理大臣を始め各党の代表が参列した式典は、核に対して世界の国々が関心を寄せている様子がうかがえました。原爆の恐ろしさを世界の人々に訴えていくことは、唯一の被爆国である日本の大切な役割だと思います。私たちはその役割を担う重要な世代です。平和大使として学んだことを皆に伝え、少しでも多くの人に戦争について学んでもらえるように、これからも平和活動を続けていきたいと思っています。

最後に、長崎の語り部さんのお話の中から一番印象に残った言葉を紹介します。

「原爆を過去のことと思わないでください。なぜなら、この世に核兵器が存在する

限りいつまた私たちの身に降り掛かってくるのか分からないからです。日本は被爆国ですが戦争の加害国でもあります。若い世代の皆さん、どうか戦争について学んでください。」

『原爆』

河原塚中学校 3年 西 志穂

皆さんは、自分の親友や家族が、目の前で苦しんでいて、自分に助けを求めているのに何も出来なかった人達の気持ちが、分かるでしょうか？私には、分からないし、想像もできません。たった64年前、そんな事が、長崎で、おこっていたのです。

1945年。8月9日に、原爆が爆発した中心地を、フィールドワークで行きました。ピースボランティアの話を聞きながら、空を見上げ、64年前に、被爆した人たちの思い出し、とても恐ろしくなりました。その後に、その当時の地層を見ると、お茶わんや、コップなどが、うまっていました。こうなった理由は、早く長崎を復興させるため、その上から土をかぶせ、埋め立てたからだそうです。その時にピースボランティアの方が言ったのは、「僕たちは、64年という歴史と、原爆で亡くなった人たちの上に立っている」という言葉でした。比喻ではなく、本当に、この土の下に、まだ多くの人の骨が、うまっているのです。

8月9日。平和祈念式典に、十五人全員で、参列。市長の平和宣言で、「被爆地・長崎に来てください。凄まじい炎などに、焼き尽くされた、7万4千人の死者の沈黙の叫び。7万5千人もの負傷者の呻き。犠牲者の無念の想いに、だれもが、心ふるえるでしょう。」とありました。確かに、そうなのです。行った人の話を聞いても、本を読んだって、長崎に行って見るのとでは、ぜんぜん違うのです。

そして、今の若い人たちが、原爆のおそろしさを知らないまま、8月6日、9日、15日を、過ごして欲しくありません。アメリカ大統領が、「反核」を言った今、私たち日本人が、団結しなくてはいけないのです。

「戦争は、勝ち負けじゃない。あるのは、死だけ。」私は、長崎や広島に行って、本当の恐ろしさを知ってもらうため、興味を少しでも持ってもらうため、自分が、話していかなければ、いけないと思いました。

私たちは、原爆で亡くなった方などの分も力強く生きていく、責任があると思います。

そして、長崎に行かせてくれた、市役所の皆さんへの、感謝も忘れないよう、がんばっていきたいです。

この3泊4日は、絶対に忘れられない、そして忘れては、いけない日となりました。

『長崎で思い学んだこと』

根木内中学校 1年 工藤 颯人

ぼくは、長崎へ行く前に図書館の本で原爆について学んでから出発しました。しかし、自分が実際に見た物は想像を遥かに越す物でした。

原爆資料館では、体中に斑点ができてしまった人や、背中の皮が溶けてしまっている人、黒こげになってしまった人の写真、十一時二分のまま止まっている時計などが展示してあったのですが、怖くてとても目を向けられませんでした。自分がこんな風になっていたらと思うと、鳥肌がたち、資料館から逃げたくなりました。

また、被爆者である山脇さんの話は、とても生々しく、重苦しいものでした。その話からは、叫び声や臭いがし、胸が締めつけられました。そして、浦上天主堂の見学では、原爆の威力を思い知らされました。たった一本しか残っていない柱。しかも、何トン何十トンもある柱が爆風によって途中でずれていたのです。その時ぼくは、「たった三メートルぐらいしかない爆弾がここまでの威力をもっているんだ。おそろしすぎる。なんで人はこんな物を作りあげてしまったんだろう。結果のすべてがマイナスになり人々を悲しませ、苦しませるのになぜなのだろう。」と体の中が悔しさと悲しみでいっぱいになりました。原爆は、何も残らない。戦争は二度とあってはならないのです。

平和祈念像には大切な意味がこめられていることを知りました。天を指す右手は、戦争と原爆、水平に伸びている左手は平和を、軽く閉じられたまぶたは亡くなられた方の冥福を祈っていることを表しているそうです。ぼく達は六十四年前に被害を受けた人達のためにも長崎で学び、思ったことを周りの多くの人に伝えていき、世界の平和を築いていかなければならないのです。

『原爆が落ちた町、長崎』

金ケ作中学校 1年 四家 明宜

1945年8月9日午前11時2分、長崎に原爆が落ち、たくさんの命が亡くなった。

僕たちは、幸せなのだろうか。原爆による後遺症に苦しみながら生き残っている人も、今は少ない。もし、今の世代で戦争が行われていたら、僕たちはどうだったろう。生まれてなかったかもしれない。昔の人たちがかわいそうである。

僕たちは、平和大使として長崎に行ってよかったと思う。行ってなければ、こんな経験できなかったはずだ。ピースフォーラムで交流ができてよかった。僕は、体調不良のため途中から他の都市から参加した平和大使たちと交流できないこともあったが、松戸の平和大使達と交流ができてよかったと思う。

また、被爆者の話も聞けてよかったと思う。前にも書いた、「昔の人たちがかわいそうである。」この話を聞いて、核をなくそうと、さらに思った。今のアメリカは、オバマ大統領の活動により、核をなくそうとしつつある。しかし、北朝鮮は核の力を強めようとしているようで、今にも、日本にミサイルを発射しそうで怖い。

今、僕たちにできる事はなんだろうか。署名活動や募金などによって核を止めることができる。今でもできる。すぐにできる。後遺症の人を助ける事ができる。僕はそう思う。

ニュースや新聞で、よくオバマ大統領が出てくるが、今、世界的に核の動きが変わりつつある。オバマ大統領のおかげである。僕たち平和大使もその一員である。

今の世の中、原爆が落とされた64年と比べるとかなり平和のように思える。しかし、核保有国を忘れてはいけない。

地球上には、核はいらないのである。もし使ったら、人間は滅びるであろう。

ただ、一つだけ、忘れてはいけないことがある。それは、「平和主義」であることだ。

『長崎に行って』

和名ヶ谷中学校 1年 児島 一華

私が、長崎に行って感じたこと。それは、千葉県では見られないようなきれいな空が一面に広がっているということでした。

こんなにもきれいな空に64年前原爆が落ちたと思うとこわくてたまりませんでした。でも、千葉には無い物や長崎という県の形にだんだん興味がわいてきました。ホテルに着いてすぐ長崎の町中を散歩しました。着いた所は、大きなビルでした。そこのおみやげコーナーで何分か見た後またホテルに帰り、食事し、夜までおしゃべりしていました。

2日目。私は体調をくずしてしまい、被爆体験しか聞けなかったけど、体験講話を聞いているとき、ものすごく悲しくなっていました。

3日目。この日は平和祈念式典に参列しました。その時おどろいたのが、原爆で死んでしまった人の数です。約十四万もの人が犠牲になってしまったと思うとむねがいたみ悲しくなります。その後も被爆者代表で奥村さんの話を聞きました。そして思いました、どうして核兵器などを作ってしまったのでしょうかと……。そのあと64年目も、8月9日11時2分がやってきました。その間の1分間は、言葉にできない思いがこみあげてどうしようもありませんでした。そして式典が終わった後、平和学習に移りました。B班だった私は「平和じゃないってどういう事？」という問題を考えました。その後、班ごとに発表の順番が回ってきました。私が発表者だったので、できる限りがんばって発表しました。

平和学習が終わってからの自主学習で、グラバー園や大浦天主堂を見学しました。全体としての感想は、長崎に行って平和ということが、ものすごく幸せだということ

とが分かりました。私の頭上にもし、原爆が落とされたらと考えることさえ、耐えることができません。二度と、そのようなことがおきないように、平和を思いつづけていきます。

『平和大使長崎派遣事業の随行を終えて』

総務課 岡田 俊雄

21世紀を担う中学生たちに、平和な未来を築く心を育んでもらうため、昨年度より始まった平和大使長崎派遣事業。今年は、市内中学校から46名の応募があり、その中から15名の平和大使が選ばれ、事前に3回のオリエンテーションを行った後、8月7日、長崎に出発しました。新型インフルエンザの流行の兆しがみえはじめた不安の中での出発、また、この日の長崎は気温36度という猛暑ではありましたが、大使たちは元気よく長崎の地へ降り立ちました。その日の夜は、大使たちが持ち寄った折り鶴を千羽鶴にするため、夜9時近くまで皆で頑張りました。

8月8日は、自分たちで計画した自主学習として、長崎歴史文化博物館やめがね橋、出島などを訪れ、長崎の歴史と文化に触れ学びました。午後は、長崎原爆資料館に昨日完成した千羽鶴を「羽ばたけ平和の世界へ、みんなで広めよ平和の輪」という願いを込めて献納しました。その後、原爆資料館を見学しましたが、実際に展示されている被災品に触れ、また、写真や映像などを目の当たりにして、改めて原爆の恐ろしさ、悲惨に衝撃を受けた様子でした。青少年ピースフォーラムでは、被爆体験講話を聞きあまりにも悲惨な惨状に涙ぐむ大使もありました。また、フィールドワークでは連日の猛暑の中でありましたが、ピースボランティアの方の説明をメモを取りながら熱心に聞き入っております。

8月9日は、平和公園で開催された平和祈念式典に参列し、原爆が投下された午前11時2分、平和の鐘が鳴り響く中、犠牲となられた多くの方々のご冥福と平和の願いを込めて1分間の黙祷を行い、改めて核兵器のない平和な世界の実現を祈りました。午後には、2日目となるピースフォーラムに参加し、地元長崎市を含め全国から集まった中高生たちと一緒に、平和について考え、グループごとに意見をまとめ、発表にも積極的に参加して交流を深めました。

大使たちにとって、この4日間に体験したことは、いつまでも心の中に残ることであらうし、平和の大切さを実感したことは勿論のこと、多くの人々とふれ合い、家族や他人への思いやりなど様々なことを学び、考えることができた4日間であったと感じております。

終わりに、今回の平和大使長崎派遣にあたりまして、ご協力をいただきました保護者の方々をはじめ、関係各位に心より感謝申し上げ、御礼の言葉といたします。

平和大使長崎派遣の 1 回目のオリエンテーションで集まった大使たちは自己紹介もぎこちなく、15 人中 11 人が 1 年生ということもあり少々頼りない印象がありました。しかし、2 回目、3 回目とオリエンテーションを重ねるうちに、皆、少しずつ自分の意見を上手く言えるようになってきました。そして、長崎では戸惑いながらも目を輝かせてその町並みを目に焼き付けていました。青少年ピースフォーラム参加前の自主学習では、気温の高さに驚きながらも、長崎歴史文化博物館などの見学に元気に取り組み、長崎原爆資料館の見学では被爆資料や被爆の惨状を示す写真などの展示を目の当たりにして、言葉を失っている大使の姿がありました。「悲惨な展示を直視するのがつらい。」とつぶやいた大使たちは、展示から当時の長崎の人々の苦しみを理解し、自分の苦しみのように感じている様子でした。被爆体験講話では、講話者の山脇さんの被爆体験講話と、直前に見た長崎原爆資料館の展示内容が重なりあって、皆、真剣な表情で聞いていました。大使たちは、今回の派遣事業により、色々なものを、自分たちの目で見て、耳で聞いて、手で触れて、長崎という町全体から湧き出る平和への祈りを身体全体で感じていました。そして、全国から集まった 200 名を超える学生とともに参加し交流した青少年ピースフォーラムのオリエンテーションでは、戦争や平和について、自分たちの考えや意見を堂々と出し合えるようになっていました。長崎に行って、青少年ピースフォーラムに参加したからこそできた経験だと思います。

今回、随行者として平和大使全員がよりよい経験ができるようサポートしてきましたが、その中で印象に残っている光景があります。それは長崎での移動の際、ある大使が荷物の多さに手間取り皆に遅れかけている時の事です。隣にいた大使が何も言わずに、自分の荷物も多いにもかかわらず、そっとその大使の荷物を持ち一緒に歩き始めたのです。日常のちょっとした優しさ、気配り、それは、他者を思いやる気持ち。あまりにも当然であるかのような光景でしたが、長崎の地で、平和の原点をそこに見たような気がしました。「人が、自分のためだけでなく、わずかでも誰かのために動けば、世の中は変わる。」そう再認識させてくれる、そんな経験をさせて頂きました。この事業に参加し成長した大使たちには、これからも平和の思いを胸に未来につながる活躍を期待したいと思います。

長崎では色々な方々に大変親切にして頂きました。長崎歴史文化博物館ではボランティアガイドの方に丁寧に案内していただきました。また、青少年ピースフォーラムでは青少年ピースボランティアの方々に爆心地周辺にある被爆建造物などを案内していただきました。平和祈念式典においても、多くの青少年ピースボランティアの方々に親切にいただきました。この場をお借りして、お礼を申し上げたいと思います。

平成 21 年長崎平和宣言

今、私たち人間の前にはふたつの道があります。

ひとつは、「核兵器のない世界」への道であり、もうひとつは、64 年前の広島と長崎の破壊をくりかえす滅亡の道です。

今年4月、チェコのプラハで、アメリカのバラク・オバマ大統領が「核兵器のない世界」を目指すと明言しました。ロシアと戦略兵器削減条約（START）の交渉を再開し、空も、海も、地下も、宇宙空間でも、核実験をすべて禁止する「包括的核実験禁止条約」（CTBT）の批准を進め、核兵器に必要な高濃縮ウランやプルトニウムの生産を禁止する条約の締結に努めるなど、具体的な道筋を示したのです。「核兵器を使用した唯一の核保有国として行動する道義的な責任がある」という強い決意に、被爆地でも感動がひろがりました。

核超大国アメリカが、核兵器廃絶に向けてようやく一歩踏み出した歴史的な瞬間でした。

しかし、翌5月には、国連安全保障理事会の決議に違反して、北朝鮮が2回目の核実験を強行しました。世界が核抑止力に頼り、核兵器が存在するかぎり、こうした危険な国家やテロリストが現れる可能性はなくなりません。北朝鮮の核兵器を国際社会は断固として廃棄させるとともに、核保有5カ国は、自らの核兵器の削減も進めるべきです。アメリカとロシアはもちろん、イギリス、フランス、中国も、核不拡散条約（NPT）の核軍縮の責務を誠実に果たすべきです。

さらに徹底して廃絶を進めるために、昨年、潘基文国連事務総長が積極的な協議を訴えた「核兵器禁止条約」（NWC）への取り組みを求めます。インドやパキスタン、北朝鮮はもちろん、核兵器を保有するといわれるイスラエルや、核開発疑惑のイランにも参加を求め、核兵器を完全に廃棄させるのです。

日本政府はプラハ演説を支持し、被爆国として、国際社会を導く役割を果たさなければなりません。また、憲法の不戦と平和の理念を国際社会に広げ、非核三原則をゆるぎない立場とするための法制化と、北朝鮮を組み込んだ「北東アジア非核兵器地帯」の実現の方策に着手すべきです。

オバマ大統領、メドベージェフ・ロシア大統領、ブラウン・イギリス首相、サルコジ・フランス大統領、胡錦濤・中国国家主席、さらに、シン・インド首相、ザルダリ・パキスタン大統領、金正日・北朝鮮総書記、ネタニヤフ・イスラエル首相、アフマディネジャド・イラン大統領、そしてすべての世界の指導者に呼びかけます。

被爆地・長崎へ来てください。

原爆資料館を訪れ、今も多くの遺骨が埋もれている被爆の跡地に立ってみてください。1945年8月9日11時2分の長崎。強力な放射線と、数千度もの熱線と、猛烈な爆風で破壊され、凄まじい炎に焼き尽くされた廃墟の静寂。7万4千人の死者の沈黙の叫び。7万5千人もの負傷者の呻き。犠牲者の無念の思いに、だれもが心ふるえるでしょう。

かろうじて生き残った被爆者にも、みなさんは出会うはずです。高齢となった今も、放射線の後障害に苦しみながら、自らの経験を語り伝えようとする彼らの声を聞きましょう。被爆の経験は共有できなくても、核兵器廃絶を目指す意識は共有できると信じて活動する若い世代の熱意にも心うごかされることでしょう。

今、長崎では「平和市長会議」を開催しています。来年2月には国内外のNGOが集まり、「核兵器廃絶—地球市民集会ナガサキ」も開催します。来年の核不拡散条約再検討会議に向けて、市民とNGOと都市が結束を強めていこうとしています。

長崎市民は、オバマ大統領に、被爆地・長崎の訪問を求める署名活動に取り組んでいます。歴史をつくる主役は、私たちひとりひとりです。指導者や政府だけに任せておいてはいけません。

世界のみなさん、今こそ、それぞれの場所で、それぞれの暮らしの中で、プラハ演説への支持を表明する取り組みを始め、「核兵器のない世界」への道を共に歩んでいこうではありませんか。

原子爆弾が投下されて64年の歳月が流れました。被爆者は高齢化しています。被爆者救済の立場から、実態に即した援護を急ぐように、あらためて日本政府に要望します。

原子爆弾で亡くなられた方々のご冥福を心からお祈りし、核兵器廃絶のための努力を誓い、ここに宣言します。

2009年(平成21年)8月9日

長崎市長 田上 富久

【用語解説】

長崎平和宣言文下線部分解説

◆包括的核実験禁止条約(CTBT)

核兵器の開発のために、これまで2,000回を超える核爆発実験が世界で実施されてきました。はじめは、空中や、宇宙で実験が行われましたが、放射線や放射線を含

んだチリが広い地域に散乱して、多くの人々が影響を被りました。

そのために、核爆発実験を地下に制限する「部分的核実験禁止条約」が1963年（昭和38年）にできましたが、核兵器をなくすためには、すべての核実験を禁止する必要があります。そこで、1996年（平成8年）に国連で合意されたのが、包括的核実験禁止条約です。

包括的核実験禁止条約が効力をもつには、核に関する技術を有する44カ国の批准（国会での承認）が必要です。米国、中国、イラン、イスラエルは、批准しておらず、インド、パキスタン、北朝鮮は、批准の前段階の署名もしていない状況であり、この条約の発効のめどは立っていません。

◆核不拡散条約(NPT)再検討会議

(1)核不拡散条

核不拡散条約(NPT)は、核兵器保有国が増える(拡散する)ことを防ぐ目的でつくられた条約で、1970年(昭和45年)に発効されました。2003年(平成15年)1月に一方的に脱退を表明している北朝鮮も含めると、現在の国連加盟国の中での加盟国は190カ国です。加盟していないのは、インド、パキスタン、イスラエルの3カ国です。

核兵器の拡散を防ぐため、それまで保有していた米・ロ・英・仏・中の5カ国だけに核兵器の保有を認め(核保有国)、それ以外の国が保有することを禁止しています(非核保有国)。

そのため、核保有国には、核兵器を減らすための交渉を誠実に行うことを求め(第6条)、非核保有国には核兵器の製造、取得を禁じています。

非核保有国には、原子力の平和利用が認められており、原子力発電所を建設する場合は、必ずそれが平和利用であるかどうかを確認するために、国際原子力機関(IAEA)の検査を受ける義務があります。

しかし、イランは、原子力の平和利用を名目に核兵器を開発している疑いをもたれ、また、核保有国の核兵器の削減も進んでいないなど、多くの問題を抱えています。

核兵器の保有国を増やさないためにも、この条約を各国が真剣に取り組むことが求められています。

(2) 再検討会議

核不拡散条約(NPT)では、核兵器の軍縮や拡散の状況を定期的に検討するため、5年毎に核不拡散条約再検討会議が開かれます。発効から25年後の1995年には、条約の延長を検討する「再検討・延長会議」が開かれ、無期限延長が決まり

ました。

2000年(平成12年)の核不拡散条約再検討会議では、核保有国による核軍縮への努力が不足しているとの声が高まり、「核兵器の全面廃絶に対する核兵器保有国の明確な約束」を盛り込んだ合意文書が採択されました。

しかし、2005年(平成17年)の再検討会議は、核保有国と非核保有国の意見が鋭く対立し、成果もなく閉幕しました。

2009年(平成21年)にオバマ米国大統領の登場で、核軍縮の機運が世界的に高まり、2010年(平成22年)の再検討会議では核軍縮と不拡散の取り組みの進展が期待されています。

◆核兵器禁止条約(NWC)

核兵器の開発、実験、製造、配備、使用をすべて禁止して、また、現在、保有している核兵器を解体して使えなくする条約。

2007年(平成19年)、コスタリカ・マレーシア両政府の共同提案として、正式に国連に提出されましたが、現在も採択には至っていません。

◆プラハ演説

2009年(平成21年)4月5日、チェコ共和国プラハで、オバマ米国大統領が「核兵器のない世界」を目指すと訴えた演説です。

オバマ大統領は、「核兵器のない世界」の実現への努力を、選挙公約にしていました。プラハ演説で、オバマ大統領は、「米国は核兵器のない世界に向けて具体的な措置をとる」と明言して、米国とロシアの新しい戦略兵器削減条約の合意や、包括的核実験禁止条約(CTBT)批准の促進や、兵器用核分裂物質の生産禁止(カットオフ)条約締結への努力など、今後の行動の道筋を示しました。

また、「核兵器を使用したことのある唯一の核保有国として、米国には行動する道義的責任がある」と強い決意を語り、核超大国・米国の核軍縮へと向かう核政策の転換を世界に強く印象づけました。

◆日本国憲法の平和と不戦の理念

日本国憲法の前文には「政府の行為によって再び戦争の惨禍が起こることのないようにすることを決意し」、また「平和を愛する諸国民の公正と信義に信頼して、われらの安全と生存を保持しようと決意した」としています。

決意を実現するため、第9条1項では、「日本国民は、正義と秩序を基調とする国際平和を誠実に希求し、国権の発動たる戦争と、武力による威嚇又は武力の行使は、国際紛争を解決する手段としては、永久にこれを放棄する」としています。

◆非核三原則

日本が、核兵器を「持たない」「つぐらない」「持ち込ませない」という3つの原則のことで、1967年(昭和42年)12月、当時の佐藤栄作首相が国会(衆議院の予算委員会)で表明しました。1971年(昭和46年)11月の衆議院で沖縄返還に関連して、初めて国の方針(国是)として決議(国会の意志を決めること)が行われました。

長崎市は、平和宣言などの機会を通じて、被爆国としての非核の立場をよりあきらかにするために、非核三原則の法制化を訴えています。

◆北東アジア非核兵器地帯構想

北東アジア非核兵器地帯とは、日本と韓国と北朝鮮の3カ国を「非核兵器地帯」にしようとするものです。条約として成立するためには、3カ国に核兵器が存在せず、核保有国(中国、ロシア、米国)は、3カ国を核兵器で攻撃をしないと約束することが必要になります。

日本では、1971年(昭和46年)に「非核三原則」の国会決議が行われ、また、韓国と北朝鮮による、「朝鮮半島非核化共同宣言」が、1992年(平成4年)に発効するなど、それぞれの国が非核化を表明しました。

しかし、2006年(平成18年)10月、北朝鮮が核実験を実施し、北東アジアの平和と安全が大きく脅かされました。さらに、2009年(平成21年)5月25日、北朝鮮は、2回目の核実験を実施し、「北東アジア非核兵器地帯」の前提となる朝鮮半島の非核化の実現は、さらに困難な状況になりました。

今後、国際社会が結束して、北朝鮮の核を放棄させることが、「北東アジア非核兵器地帯」の実現には必要となります。

◆放射能の後障害

原爆の放射線障害は急性障害と後障害に分けられます。急性障害は大量の放射線を浴びたときに出る症状で、嘔吐、下痢、発熱、皮下出血などを発症したのちに多くの人が死亡しました。

後障害は、被爆して数年から数十年してから現れる障害で、がんや白血病、白内障などがあります。

◆平和市長会議

1985年(昭和60年)8月5日から9日まで、長崎市と広島市の呼びかけに応じた国外22カ国、67都市、国内33自治体に参加して、第1回世界平和連帯都市市長会議(現在「平和市長会議」に名称を変更)総会が開催されました。

現在、加盟都市数は134カ国・地域、2,963都市に拡大しました(H21.7.1現在)。松戸市は、平成21年4月1日から加盟しています。

会長は、広島市長、副会長は、長崎市長他9都市が務めています。主な取り組みとしては、2020年までに核兵器廃絶を目標にした「2020ビジョン」の策定や、核保有国に都市を核攻撃の目標にしないよう求める「都市を攻撃目標にするな(CANT, Cities Are Not Targets)プロジェクト」のほか、核保有国に期限を決めて核兵器を削減させるために、「ヒロシマ・ナガサキ議定書」などのユニークな活動を展開しています。特に、「ヒロシマ・ナガサキ議定書」については、来年、2010年(平成22年)に開催される核不拡散条約(NPT)再検討会議での採択を目指しており、現在、署名活動が続けられています。

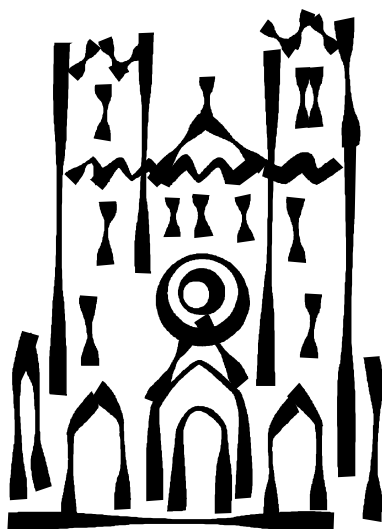
平和市長会議は4年に1度、総会を開催し、本年8月7日から10日まで、「核兵器廃絶を私たちの手で！」を基調テーマに、「第7回平和市長会議総会」を長崎市で開催します。

◆核兵器廃絶—地球市民集会ナガサキ

国内外のNGO・自治体関係者・市民が長崎に集結し、核兵器廃絶と恒久平和の実現にむけた具体的に活動方針を話し合う集会で、官民一体となった実行委員会が企画と運営を行っています。

これまで、2000年、03年、06年と3回開催され、それぞれ「長崎アピール」を採択してきました。

2010年(平成22年)2月には、第4回目の集会が開催される予定で、2010年の核不拡散条約(NPT)再検討会議に向けて、NGOの連携が期待されています。



平成 21 年度

平和大使長崎派遣事業報告書

～羽ばたけ平和の世界へ～

松戸市
総務企画本部総務課

平成 21 年 11 月発行